



平成22年度春季講座'歴史遺産と生きる'第2回講演要旨

## 極楽寺の文化財と生きる

講師：極楽寺住職 田中密敬さん

とき：平成22年5月22日(土) ところ：極楽寺客殿

### ◎極楽寺の前身と創建

平安末期に深沢の里に既に極楽寺の前身の寺があった。その後鎌倉時代に入り、正永和尚の死後廃れたが、北条重時が寺院再興を思い立ち、忍性を招き相談した。寺では創建をこの年、即ち1259年としている。

開基の北条重時は執権を補佐する連署を勤めたが、その前は六波羅探題の時代が長かった。京では藤原定家とも交わり、歌は『新勅撰和歌集』などに採られている。幕府内での处世術などを100条近くにまとめた『六波羅殿御家訓』等も残している。重時の家系は極楽寺流と言われ、後の執権赤橋守時らにつながって行く。

### ◎清凉寺式釈迦如来像

忍性は1267年に開山として極楽寺に入寺した。寺の本尊としたのは清凉寺式釈迦如来像で脇に配したのは十大弟子像であった。清凉寺式の像にはその濫觴にひとつの伝説がある。釈迦在世の日、亡くなられた母摩耶夫人のもとへ90日間の説法に行かれた。その不安感を解くために、優填王が国中の工人達に釈迦像を造らせたという生身を写した像である。その形が中国に伝わり、模像を唐に留学した東大寺の齋然が持ち帰り、伝えた釈迦像である。



十大弟子像(舍利弗)

平安時代の末は武士が台頭し、荘園制度も変化してきたが、仏教の世界でも従来通りでよいのか、という思いが芽生えてきた。唐招提寺を再興した実範そして明恵から貞慶へ、末法の時代に釈迦の教えに帰ろうという考え方が生れてきた。

その象徴が生身仏像であり、もう一つが釈迦の教えを直接受けた十大弟子の像であった。そして、釈迦の時代に帰るには戒を守ることだ、となった。

日本に戒律を体系的に伝えたのは鑑真で、唐招提寺には『東征伝絵巻』があって戒壇を設けた様子を

伝えている。戒を守る伝統を受け継ぐ活動は奈良西大寺が拠点となり、忍性の師の叡尊などが戒律復興に取り組んだ。僧団内の確認事項が戒、細かい定めが律で、忍性の開いた当寺は極楽律寺と称していた。真言律宗とは明治以後の名称である。

初源の仏教に戻ろうということで、衣は香色(土の色、最後は土に還る)を用いた。

### ◎慈善事業と寺の変遷

創建の後発展していき、金堂、方丈などが揃い、他に療養所やハンセン病者の治療施設なども建てた。『とはずがたり』の著者の後深草院二条もこの頃極楽寺を訪れ、寺の様子を記している。忍性は幕府祈祷寺にしてもらうことで、宗門の安定を図り、生き物を殺生から守らせた。

1303年に忍性は87才で入寂したが、忍性塔もこの頃造られたと思われる。その後長老は栄真、順忍と続いた。

1333年の新田義貞の鎌倉攻めでは、極楽寺辺りが戦場になり被害を受けたが、その後は後醍醐天皇の勅願所とされた。そして足利尊氏とその子の鎌倉公方基氏などから保護を受けてきた。

室町時代には火災被害等を受けたが、その後、性善による第一の中興があった。

第二の中興は江戸時代の恵性によるもので、仏法寺を移して方丈とし、仏像修復などを行った。

明治に入ると神仏分離令の発布で、それまでの朱印寺院は寺領を失い、苦勞することになった。教部省は七宗以外の寺は廃寺としたため、西大寺一門は真言宗に入った。その後南都の諸寺の伝統が認められ、明治30年代には真言律宗となった。

1923年の関東大地震では、大方の建物が倒壊、文化財も被害を受けた。鎌倉町には復興の見込みが難しいと報告した。第二次大戦後は寺地が減少した。

寺は代々仏像、文書などを守って今日まで続いてきた。それらを今後も守って行く。

国は文化財を美術品として指定するが、されないもので大事なものも多い。辻のお堂を地元が守るように、地元の守る姿勢は大事だ。伝えられてきた文化財は身近にあるべきである。

## ◆ 第2回 世界遺産登録推進のための意見交換会 ◆

## 足元の文化財を守り伝えるための地域活動

8月13日(金)、市役所第3分庁舎において、第2回意見交換会が開かれました。荒井章さん(意見交換事業実行委員長)の司会で、内海恒雄さん(広報部会長)の世界遺産登録推進協議会の活動についての説明、岩壁宗孝さん(深沢地区連合町内会長)・山井照久さん(同副会長)・内海勉さん(山崎町内会長)など三名の招待者による、深沢地区の活動についての報告があり、それを契機に、様々な視点からの意見が交されました。地域の伝統文化・文化遺産の保護や地域住民による新たな行事への取り組みは、世界遺産登録推進の重要な支えですが、そのような意識を共有した有意義な会でした。

交された意見を要約して紹介します。

## ●鎌倉世界遺産登録推進協議会の活動

鎌倉の登録推進活動は行政と市民が一体となっており、行なわれている。深沢地区には国指定の史跡となった『北条氏常盤亭跡』や大仏切通、大寺院で寺分という地名の起源となった大慶寺など、貴重な遺跡や文化遺産が多い。開発による消滅の危機にさらされながら、伝統的な祭や古文書なども地域の人の力で守られている。この地区を除いて世界遺産は考えられない。

## ●深沢の市民活動

深沢地区は梶原・寺分・上町屋・山崎・手広・笛田・常盤からなる。かつての深沢7ヶ村の親睦を図る有志懇親会や地区在住市議会議員との懇談会・文化祭その他が行われており、梶原の御霊神社や山崎の北野神社および上町屋の天満宮の湯立神楽などいくつかの伝統文化がある。御霊神社にはかつて太鼓橋があり、鶴岡八幡宮の造りに共通する。湯立神楽の時には、等覚寺の住職を招いて、深沢小学校裏のやぐらに祀られている梶原景時等の供養も行なっている。

## ●深沢の夏と冬の祭

「ふかさわ夏まつり」では、新川とうろう流し・万灯みこしお練り巡行・ふかさわズンドコ踊り・盆踊り・歌謡ショーや模擬店などが催され、「冬まつり」では、樹木にイルミネーションの飾り付け・みこし・中学生のバンドなどが催されるが、近年若い人が増えて盛り上がっている。連合町内会による新しい祭である。それに対し伝統的な祭として各町内会の神社祭礼がある。

## ●深沢地区の特色と問題点

交通の利便性に優れ開発の進んだ深沢地区は、

市街と自然の緑との調和、文化財の保全に関してモデル地区となり得る。しかし貴重なバッファゾーンである緑の山は、藤や蔦類を除去するなどの手入れをしない限りたちまち荒廃する。例えば野村総研跡地周辺の緑は危険な状態である。緑の荒廃は文化財の崩壊につながる。開発と緑地をうまくコントロールしなければならない。

鎌倉駅・大船駅周辺に対して、深沢に第三の拠点を作ろうという計画がある。JRから購入した土地とJR工場跡地を中心として新市街を造る計画であるが、隣接する土地や自然との調和を図りつつ、地域の様々な歴史を取り入れていくことが望ましい。ただJRの跡地には土壌汚染の問題があり、その解決が前提となる。

## ●遺産登録に関する地域の意識と課題

深沢地区においては自分たちの地域は世界遺産の対象外という冷めた意識があり、盛り上がりに欠けている。また市民となってまもない人が多く住んでいるマンションは、場所によっては啓発活動の一つの壁となっている。地元に有形・無形の文化財がありながら、あまり知られていないのが現状である。

遺産登録候補の文化遺産から外れてはいても、深沢地区の神社や寺院は旧市内のそれらとつながっており、決して無関係ではない。自分の所はどこにつながっているか勉強すべきである。例えば鎌倉攻めで最後の執権赤橋守時が命を落としたのも、唯一の鎌倉武家の館跡「北条氏常盤亭跡」があるのも、この地区である。これらの歴史を知れば、由緒のある地域であることがわかる。

文化遺産は周辺と切り離されて孤立しているわけではなく、周辺を含めて総体的に保存する必要がある。例えば深沢地区も含む仮粧坂や大仏切通は、切り立った崖だけに文化遺産としての価値があるのではなく、山の稜線まで含めて、出入り口からそれに通じる地域と一体化させて把握することに意義がある。また文化遺産はそのような空間的な広がりばかりではなく、時間的な流れとして把握しなければならない。寺社への参詣が市民に定着したのは、鎌倉武士が発端であり、それが現代にまで伝えられている。そのように文化財は時空のひろがりをもって現代を覆っている。世界遺産登録を視野に入れて、宗教や宗派を超えた、市民が楽しめる祭を企画してはどうだろうか。そのような大胆な発想も、世界遺産登録を推進するエネルギーになるだろう。今後は行政と市民の垣根も取り払って討論していきたい。